

何遜の「聊作百一體」の詩について

著者	沼口 勝
雑誌名	漢文學會々報
巻	34
ページ	13-25
発行年	1975-06-21
URL	http://doi.org/10.15068/00149242

何遜の「聊作百一體」の詩について

沼 口 勝

一

梁の何遜（四八〇？—五一八？）は、景情融合した趣深い山水詩の秀作を遺した詩人である。明の陸時雍の「詩鏡總論」に「何遜の詩は、語語實際にして、了く滯る色無し。其の景を採るや毎に幽微に入り、語氣は悠柔にして、之を讀めば殊に不盡の纏綿の致あり。」と評するのは、その山水詩の特色をよく捉えたものというるであらう。

ところで、近年何遜の詩についての關心も漸く高まりを見せ、中國科學院文學研究所編「中國文學史」（一九六二年刊）にその詩についてのやや詳しい論評を載せるのをはじめとして、小尾郊一氏著「中國文學に現われた自然と自然觀——中世文學を中心として——」（一九六二年十一月刊）、森野繁夫氏稿「梁の文學集團と個人（一）——何遜について——」（廣島大學教育學部附屬高等學校國語科紀要一所收一九六八年九月）および山田英雄氏稿「何遜の詩風」（名古屋大學文學部研究論集五五所收一九七二年三月）などの著書・論

文があり、それぞれの角度から何遜の詩およびその傳記について示唆に富む論述を展開している。

さて、小論は、これまでの研究があまり取り上げなかつた「聊作百一體」と題する詩一篇を中心に据え、この作品の語る意味が、作者の文學的世界にいかなる比重をもつものであるかを、その他の作品とも関連させつつ述べるものである。「聊作百一體」の詩は、いうまでもなく魏の應璩（一九〇—二五二）の「百一詩」に倣つた作であり、若干の樂府と聯句を含めて百十餘首の現存する何遜の作品中、かなり毛色の變つたものである。

二

「聊作百一體」の詩は、五言二十一句、百十字からなる作品である。左にその詩を掲げて内容の分析検討を試みるが、その表現は典故を多く用いるので、説明の便宜上全體を四節に細分して考察したい。

（本文に附した。は平聲・は仄聲を表わす）

靈輒・因桑下 靈輒は桑の下こかげのひとに因たより

於陵・拾李・蟪 於陵のひとは李の蟪むしくいを拾ひろう

歷齒・方嗟賤 歴きはらな齒のつまは方まさに賤ひげを嗟なげけども

炙背・豈知豪 背あぶを炙あぶるおつとは豈いかでに豪おごを知らんや

靈輒は、春秋時代晋の人、嘗て三日食らわず飢えて倒れていたところを、狩りに來て桑の木陰に息うていた趙盾に食を恵まれた恩に感じて、後、趙盾が晋の靈公に殺されかけた時、その危機を救つてやつたという。「左傳」の宣公二年の條に見える話である。また、於陵とは、戰國時代齊の陳仲子のこと、兄の世話になるのを好まず家を出て於陵に住み、三日食らわず、衰弱して耳は聞こえず目も見えなくなり、井戸のほとりの李の樹の下にはつて行き、落ちていた虫食いの實を食らつてやつと耳目の力が恢復したという話が「孟子」の滕文公章句下に見え、孟子からみみずの節操だと評された人である。靈輒と陳仲子とは、好むと好まざるとの相異こそあれ、ともに空腹に苦しむことにおいてひとしく、貧士の飢えに悩むさまを表わす人物としてこの二句に登場しているのである。

第二聯は靈輒と陳仲子のように飢凍に悩む貧士の夫婦の姿が諧謔的に描かれている。歷齒の話は、當の貧士を指すとするよりも、むしろその妻をいうと考えるほうが妥當で

あろう。宋玉の「登徒子好色賦」の序に、登徒子の宋玉を好色なりとする説に反駁して、宋玉が登徒子こそ好色であることを説いた一節があり、「其の妻は蓬頭・顰眉・歷齒・旁行・踽踽にして、又疥且つ痔なり。登徒子は之を悦んで五子を有ましむ。」という。醜くやつれた貧士の妻を歷齒の語で表現したものであろう。また、炙背の語は、「列子」の楊朱篇に載せる、春の日差しに背を曝してその暖かみを無上のものに思つた宋の田夫が、これを國王に獻じたならば立派な褒美にありつけるであらうと妻に語つたのを聞いて、村の金持ちが、昔、せりなどの水草を美味と思つていた者がいて、郷豪（村の勢力者）にそのうまさを吹聴し、これを試食した郷豪はひどい目に會いその男を恨んだという話を聞かせた故事にもとづくであらう。以上の典故から考えて、この二句は、貧乏と子だくさんに醜くやつれ果てて賤しい身を嘆く貧士の妻と、一方、暖かい衣など着たためしがなく、村の勢力者が廣く暖かい家屋に住み、綿入れや毛皮の衣に包まれて暮らしていることをも知らない、氣樂といえども氣樂なその夫との、ちぐはぐな姿を諧謔的に描いているといえよう。

傭耕・乏旅力 耕に傭うでわるるは旅力うでぢからに乏しく
倚市・憚劬勞 市に倚たよつは劬勞うづらひを憚る

曠日・無豆飯 曠日 豆飯だに無く
方冬・缺・縹袍 方冬 縹袍すら缺く

第二節は、貧乏暮らしから脱け出そうにもその能力や才覚を全く缺いて生まれついたとでもいうよりほかのない、無力でみじめな貧士の姿を戲畫的に描いている。傭耕の語は、「史記」の陳涉世家に、陳涉が若い頃人に傭われて耕作していた時、「もし富貴になつても互いに忘れないようにしよう。」といったのを雇い主が笑つたので、「ああ、燕雀安んぞ鴻鵠の志を知らんや。」といつて溜息をついた有名な話に出るものであり、また、倚市の語は、同じく「史記」の貨殖列傳に、「夫れ貧を用て富を求むるは、農は工に如かず、工は商に如かず。文を刺繡するは市門に倚るに如かずとは、此れ末業は貧者の資なるを言へるなり。」とあるに依據するであらう。傭耕者（農奴）から身を起こした陳涉は天下を席捲した。貧士は傭耕者に身を落とそうにも、腕力を欠いてそれさえも不可能なのである。そこで末業たる商を試みようとするが、商賣の苦勞を克服する才覚を欠いている。士としての自尊心を捨て、庶民や農奴階層に身を落として貧からの脱出を考えるが、考えるばかりで生活能力を根本的に欠いている貧士に生きる道はないのである。

ところで、右に引用した「貨殖列傳」の文の直前に、次のような一節がある。

「若し家貧にして親老い、妻子軟弱にして、歳時にも祭祀し進饌するに以無く、飲食・被服も以て自ら通するに足らず、此くの如くなるに慙恥せざるに至らば、則ち比する所無し。……巖處の奇士の行無く、而も長に貧賤にして、仁義を語るを好むは、亦羞するに足るなり。」

親や妻子がありながら、先祖の祭りや隣人たちとの交際も果たすことができず、飲食・被服もままならぬ貧乏暮らしをしながら恥じとも思わぬ者、仁義を語りたがるくせに貧賤から脱け出ることのできぬ無能の士、司馬遷が人ではないとして痛烈に批判を加えているこのような輩を、何遜もまた描こうとしたのであるかも知れない。

さて、かくて陥る相い變わらず衣食を欠く貧乏暮らしを、続く二句で描くのである。豆飯の語は、「戰國策」の韓策に、張儀が韓の襄王に韓の地の特徴を説いて、「韓の地は險惡にして山居し、五穀の生ずる所のものは麥に非ざれば豆、民の食する所のものは大抵豆飯・藿羹にして、一歳收らざれば民は糟糠だも厭かず。」ということばより出る。豆飯は粗食の代表的なものである。

第三節十句は、苦況を打開しようと焦る貧士の心理とそ

の行動の結果とを描く。

清旦・開蓬・華 清らなる旦蓬華を開き

舉目・想煎・熬 目を舉ぐれば想いは煎熬す

樞機・愼僕・隸 樞機は僕隸にすら愼み

媒蘖・畏朋・曹 媒蘖は朋曹をも畏る

萬途・皆自・僻 萬途 皆自ら僻け

一事・豈他・褒 一事 豈に他の褒めるあらんや

忽忽・昨不・定 忽忽として昨まで定まらず

負杖・出蓬・蒿 杖に負りて蓬蒿を出す

逢施・同溝・壑 施しに逢えば溝壑に同じく

値設・及糠・糟 設に値えば乃ち糠糟のみ

「呂氏春秋」の去宥、もしくは「列子」の説符の各篇に、齊の國の男で市場の金商人から金をかつぱらつて逃げようとした者がいて、役人に捉まりその行爲を詰問されると、「金を擱んだ時には人など目に入らず、ただ金だけが目に入つたのだ。」と答えた話があるが、この金泥棒が市場に出かける時のさまを「清旦・衣冠して市に之く」と描いている。この節の第一句に、貧士が「清旦・蓬華を開」いて家を飛び出して行こうとするのは、「呂氏春秋」の話と関連させて理解するならば、泥棒でもやりかねないせつば詰まつた心理になつてゐることを作者が描こうとしたものである

かも知れない。次の句の煎熬の語は、王逸の「九思」の怨上に、「我が心は煎熬し、惟だ是れ用て憂ふ。」とあるように、憂心のさまをいう。

さて、次の四句は、貧士が自らの生き方を回顧してのことばである。それは、己を今日のみじめな境遇に突き落とした原因を、過去の生き方の中に探ろうとして發したことがかと思われる。樞機というのは戸のとぼそと弩のひきがね、あるいは、この二字で戸のとぼそであるが、「易」の繫辭上傳に、「言行は君子の樞機なり。樞機の發は、榮辱の主なり。言行は、君子の天地を動かす所以なり。愼まざる可けんや。」とあるように、君子にとつて最も大切な愼むべきものの、即ち言行を意味するであらう。また、媒蘖の語は、人の短所をあげつらい罪をこしらえてこれに陥れることをいう。「漢書」の李陵傳に、武帝の下間に司馬遷が答えて李陵を辯護したことば、「今、事を擧げて一たび幸ならざれば、軀を全うし妻子を保つの臣隨つて其の短を媒蘖するは誠に痛む可きなり。」とあるのによるであらう。さらに、朋曹という語は、東方朔の「七諫」の諷諫に、「賢良蔽はれて羣せず、朋曹比して黨與す。」というように、邪心をいだいて徒黨を組みやすい輩という印象を與える語である。

言行に愼み、罪に陥れられることを畏れ、極度に要心し

て生きてきたゆえに、名や富や力を得るあらゆる道をみな自ら遠ざけてきた結果は、僅か一つの事さえも他人から褒められたということもない生き方であつた。そして、忽忽と昨日までの人生を落ち着かぬままに過ごし、今、杖にたよつて蓬蒿の廬を衣食を求めて出て行こうとする。まるで乞食のように人から施しを受け、たまたま食事に招かれても、そこでありつめたのは糠糟ばかりである、というのが最後の四句を含めてのこの八句全體の大意である。なお、溝壑の語は、「説苑」の立節篇に、「伋は之を聞けり、妄りに與ふるは物を溝壑に遺棄するに如かず。伋は貧なりと雖も身を以て溝壑と爲すに忍びず。」とあるのによれば、故なく人から物を受ける者、即ち乞食というに近い。縕袍も持たぬ子思が、田子方から裘を受けなかつた故事を引用していることから見れば、貧士が受けた施し物は縕袍であつたであらう。

第四節は、貧乏を載せたまま月日は近く水の如く無情にも経過し、世人は皆木石のように恥じ知らずの人でなしと蔑むが、鳥ならぬ身は翼を擴げて奮い起ち、名譽や富を獲るすべもない、と貧士の嘆きを訴えるのである。

生途・稍冉冉　生途　稍く冉冉たり
逝水・日滔滔　逝水　日に滔滔たり

感言等木石　威木石に等しと言うも
誰當出羽毛　誰か當に羽毛を出すべけんや
最後の句の「出羽毛」ということばに類似の語は、何遜の作品中に三例見つけられる。友との別れを惜しんで、でさることならば友に従つて行きたい、また、千里の彼方にある友に會いに行きたいという願望を託した場合に用いられることが多いのであるが、この場合は次に引用する「仰贈從兄兕寧賓南」の詩に見える例に近い表現であらう。

幸逢四海泰　幸いに四海の泰らかなるに逢い

日月耀增輝　日月は耀きて輝を増せども

相顧無羽翮　相顧るに羽翮無し

何由總奮飛　何に由りてか奮飛を總べん

以上、「聊作百一體」の詩を取り上げて、やや煩瑣と感じられそうなまでに語の出典の檢索を中心として、その内容の分析檢討を試みてきた。次に章を改め、この詩と應璩の「百一詩」との比較を行ない、さらに何遜の他の作品との関連について考察を試みたい。

三

應璩の「百一詩」については、既に吉川幸次郎博士の「應璩の『百一詩』について」（京都大學文學部五十周年記念論文集、一九五六年十一月）という論文に詳論されてい

る。吉川博士は、明の馮惟訥の「古詩紀」、および張溥の「漢魏六朝百三家集」に輯録されている詩篇と若干の斷片、さらにこれらの總集の輯録にもれた斷片が、「北堂書鈔」・「初學記」・「太平御覽」など唐宋の類書に散見されるのを前者とともに綜合して考察され、現存の遺篇による限り、「百一詩」は次の四つに分類されると述べられる。即ち、一、當時の政治を批評するもの。二、一般的政治論。三、ひろく人間へのいましめ。四、人間の生活の種種相を描寫するもの。そして、博士は、四の「人間の生活の種種相を描寫するもの」のひとつに、「貧士の形容」を描寫したものとて四片の斷片の詩句のあることを指摘提示されている。即ち、次の各句である。

○秋日苦促短 秋の日は促短なるに苦しみ

遙夜邈綿綿 遙かなる夜は邈かに綿綿たり

貧士感此時 貧士は此の時に感じ

慷慨不能眠 慷慨して眠る能わず

○貧子語窮兒 貧しき子の窮しき兒に語るらく

無錢可把握 錢の把握(？)す可き無し

耕自不得粟 耕すも自のずと粟を得ず

采彼北山葛 彼の北の山の葛を采らん

簞瓢恆自在 簞と瓢と恒に自在なれば

無用相呵喝 相い呵喝するに用無し

○革帶繩爲□ 革帶は繩を□と爲し

複舄穿無底 複舄は穿あきて底無し

○竈下炊牛矢 竈の下には牛の矢を炊き

甌中莊豆飯 甌の中には豆の飯を莊う(莊は裝の誤か)

(訓讀も吉川博士の前掲論文による)

ところで、吉川博士は、「百一詩」の遺文を通觀して認められることとして、次のようにいわれる。

「これらの遺文はどれも自己の情念の表白ではない。人間の批評、あるいは人間の觀察である。(中略)またその詩は、單に人間を觀察し批評するばかりではない。人間の生活の方法に對し、勸告教訓を與えんとする態度を常にもっている。或いは一般の人間に對してである。要するにそれは教訓詩であり、諷刺詩である。」

また、博士は、「百一詩」の表現における特徴として、「措辭の特殊さ」を挙げ、具體的な事象として、「俗語の使用」・「對句の使用が多くないこと」・「平易率直な表現」などの諸點を數えておられる。

さらに、博士は、「百一詩」の教訓詩諷刺詩としての性質が、ひとり現存の遺文ばかりでなく、その全體をおおうものであつたことを側面から示す資料のひとつとして何遜に

「聊作百一體」の詩のあることを指摘され、「これまた勸告教訓の意をもつた詩である。」と述べておられるのである。

さて、以上が吉川博士の所論中何遜の作に關連すると思われる事項の概要であるが、これらの指摘を「聊作百一體」の詩にあてはめた場合、凡そどのような共通點・相異點が考えられるであろうか。

まず共通點として考えられることから擧げるならば、第一に、何遜の作は貧士の生活・行動・心理を比較的冷靜に描寫していることである。作品自體は貧士の自述として構成されているが、貧士は作者そのものではない。作者の視點は貧士の背後にあり、彼の眼を通して見た彼の生活・行動・心理を語るのである。そこに「歷齒方嗟賤・炙背豈知豪」というような貧士の夫婦の貧乏生活に對する態度のくいちがひから生まれる諧謔味、また「傭耕乏旅力・倚市憚劬勞」というような無慘な戲畫が描出されるのである。吉川博士は何遜の作を「勸告教訓の意をもつた詩」とされているが、私の讀み方に従えば、この詩から求められる「勸告教訓の意」とは、家族を飢凍させながら生活能力を全く欠いている貧士というものの人として恥ずべきあり方、既に注意した司馬遷の批判の對象にされているような貧士のあり方を、何遜もまた自らを含む世の人々に對して勸告教

訓しているのであると理解する。「百一詩」の勸告教訓の意をもつ點を何遜の作にも認めてよいであろう。

第二は、「百一詩」の「貧士の形容」を描寫した詩句が斷片であるので嚴密な比較對照を試みることは困難であるが、何遜の作に「百一詩」と類似した描寫のあることに注意したい。例えば、「傭耕乏旅力」の句は「百一詩」の「耕自不得粟」の句と、農事に全く無能の貧士のさまを描寫する點で類似し、また、「曠日無豆飯」の句は「百一詩」の「甌中莊豆飯」の句と、貧士の乏しい臺所を描寫する點で類似し、さらにこれはやや類似というには遠いが、「逢施同溝壑・值設乃糠糟」の句は「百一詩」の「革帶繩爲□・復鳥穿無底」の句と、乞食のような境遇に落ちこんでいる貧士のさまを描寫する點で近いであろう。

次に相異點として考えられることを擧げるならば、第一に、措辭において何遜の作はとり立てて特殊であるとは認められないことである。俗語の使用も認められず、對句は全て二十二句中の十六句がこれを用い、表現は典故を多用して、難解といわぬまでも「平易率直」ではない。しかも韻律を整える配慮が充分なされている。何遜の作は措辭において明らかに「百一詩」と對蹠的である。これは何遜の作が、勸告教訓の意をもつ反面、貧士の姿を巧妙な整つた

ことばで描くことにも意欲を示していることを示すものであろう。

第二には、「百一詩」に描かれる貧士は「貧士感此時・慷慨不能眠」というように、世をいきどおる心をはつきりと示すのであるが、何遜の作においてそれは稀薄であると感じられることである。何遜の作にも「感言等木石・誰當出羽毛」というように、世にはばたこうにもそのすべのなさを嘆きいきどおる心が示されるのであるが、詩全體の中でこの句を見る限りいきどおりの心は稀薄に感じられ、嘆き、恨みの心がより強く感じられるのである。

さて、以上の比較から次のようにいえるであらう。何遜は「百一詩」に倣つて、耕作や商賣に向かず生活の資を獲る手段を欠く貧士というものが、一步道を踏み外すと乞食にひとしい貧窮に一生呻吟しなければならぬ運命にあることを、勸告教訓する意圖をもつてこの詩を作つたのであらう。その一方、貧士のありさまを、對句や典故を多用し韻律の均衡に配慮して美的機智的に表現することにも熱心であつた。また、ここに描かれた貧士は一應虚構であるが、寒門出身の作者に、貧士の辿る無慘な運命は切實な關心事であつたと思われる。この詩の末尾の句に「誰當出羽毛」というその「出羽毛」の語は、既に注意したように、

何遜にとつて切實な願望を象徵する愛用語とでもいふべきものであるが、ここにそれが用いられていることは、貧士の嘆きが作者の嘆きでもあることを示すものではあるまいか。貧士の背後に隠れていた何遜の心情が顔を覗かせているように思われる。

何遜には自己の閱歷をふり返り、事の願いと違つてしまつたその挫折感を訴える若干の作品が存する。次にそれらの作品を眺めることによつて、「聊作百一體」の詩の裏面に潜む作者の感情の世界を見ることがとしたい。

贈諸遊舊

弱操不能植	弱操	植つる能はず
薄伎竟無依	薄伎	竟に依る無し
淺智終已矣	淺智	終に已んぬるかな
令名安可希	令名	は安んぞ希う可けんや
擾擾從役倦	擾擾	として從役に倦み
屑屑身事微	屑屑	として身事微なり
少壯輕年月	少壯	には年月を輕んじ
遲暮惜光輝	遲暮	なれば光輝を惜む
一塗今未是	一塗	も今未だ是ならず
萬緒昨如非	萬緒	昨非なるが如し
新知雖已樂	新知	は已に樂しと雖も

舊愛盡睽違 舊愛は盡く睽違れり

望郷空引領 郷を望んで空しく領を引き

極目淚沾衣 目を極めて涙は衣を霑す

.....

第一句「弱操不能植」とは、生來意氣地がないために信念をうち立てることができないこと、「晋書」の袁湛傳に、

「湛は」少きより操植有り、冲粹を以て自立して文華無し。」というのによれば、操植とは世俗に背け向けても吾が道を行く信念ということか。第十句の萬緒とは、あらゆる事がらとそれにまつわる感情、「列子」の周穆王篇に長いこと健忘症であつた男が、病の治癒したとたん「既往數十年來の存亡得失、哀樂好惡、擾擾として萬緒起こりぬ。」といつて怒つた故事に出ることばである。

贈族人秣陵兄弟

吾宗昔多士 吾が宗は昔より士多く

文雅高縉紳 文雅は紳縉に高し

小子無學術 小子 學術無く

丁寧困負薪 丁寧 負薪に困しむ

.....

顧余晚脫略 顧るに余は晩に脱略し
懷抱日湮淪 懷抱は日に湮淪す

游宦疲年事 游宦 年事に疲れ

來往厭江濱 來往 江濱に厭う

十載猶先職 十載 猶お先の職にあり

一官乃任具 一官 乃ち眞に任す

士牛竟不進 士牛は竟に進まず

芻狗空重陳 芻狗は空しく重なり陳なる

羈旅無儔匹 羈旅 儔匹無く

形影自相親 形と影と自ら相い親しむ

.....

この詩は、秣陵の令であつた親族の何思澄に贈つた全て四十八句からなる長篇である。

贈江長史別

.....

中歲多乖違 中歲より乖違すること多く

由來難具敘 由來 具さに敘べ難し

.....

籠禽恨跼促 籠禽は跼促を恨み

逸翮超容與 逸翮は容與を超ゆ

.....

江長史が誰であるかは不明であるが、その江長史が新しい任地に出發する時贈つた詩である。

以上の三篇は、前掲の山田英雄氏の論文によれば、いずれも何遜の後半生第四期（五一七年六月から死没まで）の作品であるという。そしてこれらの作品に表わされているところを見るならば、最晩年の何遜は、長期間にわたる地方軍府の屬僚の生活に倦み疲れ、旅の孤獨に悩み故郷を慕いながら、中年以後とかく願いとくいちがうこと多かった己の人生をふり返り苦い挫折感を味つていたことが理解されるのである。何遜の願いを阻み、その人生に挫折をもたらした大きな要因は、「贈諸遊舊」の詩でいうような弱操・薄伎・淺智のいづれでもないと、おそらく彼自身考えていたと思われる。充分な才能を備えながらもそれを發揮することを阻まれているものの嘆き・恨み、何遜は寒門出身者のそうした感情を「籠禽恨跼促」ということばに表わしている。前掲の森野繁夫氏の論文に既に指摘されているところであるが、寒門出身者であるがゆえに榮達の願いの遂げられぬ嘆きを、何遜は次のように詠うのである。

仰贈從兄興寧廣南

家世傳儒雅 家世 儒雅を傳え
貞白仰餘微 貞白 餘微を仰ぐ
宗派已孤狹 宗派は已に孤狹にして
財産又貧微 財産も又貧微なり

棲息同蝸舍	棲息には蝸舍を共にし
出入共荆扉	出入には荆扉を共にす
松筆時臨沼	松筆もて時に沼に臨み
蒲簾得垂帷	蒲簾もて帷に垂らすを得
幸逢四海泰	幸いに四海の泰らかなるに逢い
日月耀增輝	日月は耀きて輝を増せども
相顧無羽翮	相い顧るに羽翮無し
何由總奮飛	何に由りてか奮飛を總べん
一朝異言宴	一朝 言を宴に異にし
萬里就睽違	萬里 睽違に就く
遠江飄素沫	遠江は素沫を飄えし
高山鬱翠微	高山には翠微鬱たり
相思對森森	相い思いて森森たるかわに對し
相望隔巍巍	相い望んで巍巍たるやまに隔てらる
死灰終不然	死灰は終に然えず
長岑且未歸	長岑 且に未だ歸らざらんとす
當憐此分袂	當に憐れむべし此に袂を分つを
脈脈淚沾衣	脈脈として涙は衣を沾す

何遜の家系は、曾祖の承天（三七〇―四四七）が宋の御史中丞に至つてゐるが、祖の翼は員外郎、父の詢は齊の太尉中兵參軍で終わつており、何遜はまさに先細りの情況に

ある寒門士人の家に生まれついたのである。右の詩に「宗派已孤狹・財産又貧微」というのは、謙辭ではなかつたであろう。八歳にしてよく詩を賦したという天與の才を鍊磨し、その力を武器にして奮闘し、門閥貴族社會の重い扉を己に向かつて開かせることが、若い何遜の切實な願ひであつたはずである。范雲（四五・一五〇三）に認められ「忘年の交好を結」んだ頃の何遜は、願望が着々と實現してゆくとうとする希望に満ちた前途を見ていたであらう。しかし范雲の死という不運もあつて、結局は官界における榮達の夢は挫折するのである。

ところで右の詩には、「聊作百一體」の詩に類似した表現のあることに氣づく。住居を描寫して「棲息同蝸舍・出入共荆扉」というのは常套句であるにしても、「聊作百一體」の詩に「清且開蓬蒿」、また「負杖出蓬蒿」というのに似るし、「死灰終不然」というのは、同じく「咸言等木石」というのに近く、生きる意欲さえ失つた屍のごとき姿をいう。

このように見てくると、「聊作百一體」の詩に描かれる貧士の生活や心理は決して借りものではなく、おそらくは晩年の、何遜にとつて切實な感情に裏づけられたものであつたとすることができるといふ。

それではなぜ何遜が、人生の敗殘者ともいふべき自分に似た貧士の像を「百一詩」に倣つたスタイルで描こうとしたのであらうか。その理由として私は次の三つの場合を考へる。一、自分を含めて人々への勸告教訓を意圖して。二、門閥社會に對する怨嗟の情を婉曲に吐露するために。三、貧士を詩の素材のひとつとして描こうとして。

即ち、一はいうまでもなく「百一詩」的發想に據るものであるが、二は「詠史詩」的もしくは「詠懷詩」的發想に據るもの、また三は「詠物詩」的發想に據るものといえるかも知れない。私には「聊作百一體」の詩は二および三の要素がなにがしらずつ混在していると思われるのである。

四

最後に貧を詠う文學としての「聊作百一體」の詩について概略述べたい。

貧を素材もしくは主題とする文學は古來數多い。貧賤であつても詩文を作る能力が無くては貧を詠うことができないし、また詩文を作る能力に恵まれても貴族の身で貧賤に憧れる者は稀れであるから、民謡のようなものを除いて、貧を詠う文學は必然的に貧しい士人階層の生活や思想、感情を詠うものとなるであらう。唐の「藝文類聚」・「初學記」などが、ともに「貧」の一類を立てるのは、唐代以前にお

いて貧が文學の一素材・一主題として成立し得ていたことを示すであろう。⁽⁵⁾

さてそれでは、「聊作百一體」の詩は、貧を詠う詩の流れの中でどのような位置を占めるものであろうか。

私は、何遜のこの詩には晋の左思（二五〇？—三〇五？）の「詠史詩」八首の其二のような、門閥社會に對して叩きつける激越な憤懣と憎惡の感情や、また陶淵明（三六五—四二七）の「詠貧士」七首の其二のような、貧士の境遇を自己の眞實の生き方にふさわしいものと甘受する安らかな態度は見られないけれども、それはそれとして、この時期の貧を詠う詩としてはすぐれた作品だと思ふ。何遜と同じく寒門出身者であり、詩を贈答しあつたこともある王僧孺（四六五—五二二）に「傷乞人詩」という作品がある。比較的對象として次に掲げる。

少年空扶轍	少年より空しく轍を扶り
白首竟填溝	白首にして竟に溝に填まらんとす
葦席何由足	葦席 何に由りてか足たさん
菽藿不能周	菽藿 周くする能わず
自顧非好行	自ら顧て好るしき行ないに非ざれども
乞且欲包羞	乞うて且た羞ずかしさを包まんと欲す

勞君款曲問 君が款曲の問を勞し

冒此殷勤酬 此の殷勤の酬を冒す

何遜の「聊作百一體」の詩は、全體にベシミスティックではあるが、寒士階層の不安な運命を描きえているといふべきであらう。（山形大學講師）

註

(1) ○ 中國科學院文學研究所編「中國文學史」は、梁陳時代の最も優秀な詩人に江淹、吳均、陰鏗と並べて何遜を挙げ、次のように批評している。「他的作品不算多、但不乏雋美的詩句與清新的意境。他擅長于刻划离情別緒、也善于描寫景物。他的詩在作風上與謝朓有些相似、但比較平弱。从格調方面看、他比永明作家更接近唐詩。……」

○ 小尾郊一氏著「中國文學に現われた自然と自然觀——中世文學を中心として——」は、何遜の山水詩の特色を、その景情融合の境地にあるとされる。また、森野繁夫氏稿「梁の文學集團と個人（一）——何遜について——」は、何遜の詩に見られる眞率な感情の表出を寒門文士であつたがゆえの切實な感情の吐露として説明され、山田英雄氏稿「何遜の詩風」は、何遜の傳記を詳細に検討し、その後半生第二期以降において寫實的詩風から抒情の詩風に轉換してゆくことを論證されている。

(2)

○ 離舟憶未極・別至悲無語、安得生羽毛・從君入宛許（贈江長史別）

○ 無因生羽毛・千里暫排空（贈韋記室黯別）

(3)

吉川博士は、南宋の葛立方の「韻語陽秋」が「聊作百一體」の詩に言及していることを注意されている。「韻語陽秋」の文は「何遜亦擬百一體、所謂靈輒因桑下・於陵拾李蟠、其詩一百十字、恐出于或者之說。」というものである。

(4)

何遜の傳記は、「梁書」卷四十九文學傳および「南史」卷三十三何承天傳にある。ともに二五〇字ほどの短いものである。

(5)

「藝文類聚」卷三十五人部十九・「初學記」卷十八參照。